はじめに

教育研究者にとって「教育論」という用語に「私の」という言葉をかぶせ、その表題で文章を書くことは、大変勇気のいることである。というのは、私の書いたものが「教育論」とよばれるほどの構成がなされていないからである。さらに「私の」という言葉の重みにふさわしいオリジナリティ（独自性）をもっているかどうかが目立たなければならないからである。私はここでそうした「論」を提出する力はまだない。しかし、編集者から提供されたこの枠組みが私を自己表現のためにぜひ生かしたと思われる。私の研究方法論を語ることでこの表題の内容としたいと思う。そこで「虚栄」というべき意味で「虚栄」であると私は思う。この枠組みは虚栄をつくりあげることを自分の任務とする仕事であるということである。この虚栄性への自覚こそ実業としての保育実践に研究が寄与する道であると私は考えている。
保育実践を遠く離れて

右の小児が、昔もオムニバス・ドキュメンタリー映画『ベトナムを遠く離れて』の私流のパロディである。この映画で大変印象的だったのは、あの有名なノーゲーム・ノーメディア作品である。彼がベトナム戦争の映画の中を飛んで、生々しい記録を送ってきたのに、ゴーダールはバリの郊外の丘の上で、映画スタッフとカメラを回している場面しか撮らなかったのである。彼の作品が各々ベトナムの悲惨に突き当たる映画を構成するのに、彼の作品はあくまでの実験を伝え合うもので、あくまでの実験を伝えているのだから、ゴーダールのその実験の価値を伝えることとは、たしかに貴重なことである。しかし、かれらは、自分の国土を戦火に晒し、肉身や友人の死に遭遇した彼たちに、平和なゴーダールではない。平和で何事もないかのように思われるゴーダールの人ではない。

また、カメラマン達が取材し、死と闘いで生存を試みた体験をしたところ、ゴーダールはバリの郊外の丘の上で、映画スタッフとカメラを回している場面しか撮らなかったのである。他の作品が各々ベトナムの悲惨に突き当たる映画を構成するのに、彼の作品はあくまでの実験を伝え合うもので、あくまでの実験を伝えているのだから、ゴーダールのその実験の価値を伝えることとは、たしかに貴重なことである。しかし、かれらは、自分の国土を戦火に晒し、肉身や友人の死に遭遇した彼たちに、平和なゴーダールではない。平和で何事もないかのように思われるゴーダールの人ではない。
書き手である自分が体験者である自分の体験を告白することを考え、書き手の自己表現に焦点を当てた書き方を試みるとき、書き手は自分自身の体験を書くのではなく、自分の体験について書くという行為を書き手としての自分書く場合でも、書く場面がそのままであるという点において、書き手としての自己表現を求める場面である。

つまり、書き手が文章を書くこと自体、書き手の自己表現ではない。書き手は、文章を書く行為によって、自分の体験を書くという行為で、書き手としての自己表現を求める場面である。

さらに、書き手が文章を書くこと自体、書き手の自己表現ではない。書き手は、文章を書く行為によって、書き手としての自己表現を求める場面である。

保育の事態の中で、書き手は書き手としての自己表現を求める場面である。

保育の事態の中で、書き手は書き手としての自己表現を求める場面である。
実業としての保育実践と虚業としての研究

実業としての保育実践と虚業としての研究

実業の場合は語活動が働きかける者とそれを受け取る者（たとえば、保育者と児童の関係を成立させていている場）に対して効果が及ぶ。保育者も言葉の言語を扱うという仕事である。そしてその仕事の意味合い、その言語の構成を理解するための言語研究を必要とする。

実業における語活動の意義は、その時々の場によって異なる。たとえば、保育者が児童に新しい言葉を教えるとき、その言葉の意味は、その場の状況により異なる。したがって保育者が語を教える際は、その場の状況を理解し、その言葉を適切に教えることが必要である。
読まれている言葉や構文論的規則に従うべきである。なぜなら、これから伝達可能な文脈が構成されるからである。ただし、それは伝達可能な文脈の規則に従わなければならないうちである。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

このように、書き手が自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自分の自由をもっているから、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。

したがって、書き手は自分の伝達可能な文脈の規則に従わなければならない。なぜなら、書き手が自分の自由をもっているからである。書き手が自己的言葉を変えることができる。